



漢物叢書

下

5

4129

2





門入利5  
號4129  
2-2

漢物叢書集下

菊与具外輯

秋之部

子何の如きやと書やと秋の秋  
初秋の先目も三やふりの重  
其の川鬼の如きやと書やと秋  
其の如きやと書やと秋の秋  
其の如きやと書やと秋の秋  
其の如きやと書やと秋の秋  
其の如きやと書やと秋の秋







成るる奇作や、秋乃を

毛多ふあひて秋七種を  
さうた

むつゝは世や葉の居も蘇るる  
稻妻やまの穂りや素湯の  
稻妻や秋の波の女中、毛  
稻つるまゆやは秋新しや  
人の中を肩てかゝや相撲取  
藤吉、若ふや桂の相撲、  
白子成風のたゝや垣刈、  
城は羽も落し秋し、  
秋人

蝶の羽はりや、秋は

俗言西より東國より  
秋風は

冬遠化を、冬葉入や、宵月秋  
欠のふく又、夜うき、秋の  
虫鳴や、夜中、秋屋を、舟く  
き、うき、秋、目、秋、折、の  
高、秋、や、秋、さ、うき、上

下各、唯、言、は、秋、再、度、と、信  
下、信、は、言、は、秋、新、秋、の、意  
を、通、き、お、り、な、う、一、種、秋  
小、和、合、の、神、と、い、ふ、一、種、を  
立、つ、り、お、り、な、う、一、種、を  
あ、て、は、し、て、お、り、な、う、一、種、を







方々もや下候奥のそとへ先  
系へけられぬの志をうやまへるを

僅るを

尾ふ敷才も智も成り曉るの如  
葉も吹もはへる折る世の如  
小ね系も若中より成ふも中り  
ふのむねと書と紙とや筆の月  
小料理も出来る月哉や盃は  
つゝの夢も来るや露葉は肝  
理も入と吐きささる雪の月

湯女の下結帯り歩けん春の月  
下帯り様、うき世をさうり  
四つとめ友ささる月をさうり  
四つとめや客路もささる月  
近しきやふと来る故に袖の下  
一羽も咲きささる月をささる  
ハ重もささる月をささる月  
其の如く新しきとささる月  
ささる月をささる月をささる  
秋の露も月をささる月をささる











ありやもしい撫くる清き葉を

良夜清光

名月やまゝのまゝなりて台に

水よみみまのまのまを  
経てなすくへる夢を  
竹の井の敷いそそ  
おるや

ありやまゝのまゝなりて井の

名月やのりまゝなりて庭の

昨日の月をいふれは月を

子代経へて現るる月を

藤の虫は海士の子も月を

夕敵のまゝなりてありやまゝなり

浪心

ありは橋を越へて月を

寺にありてのまゝなりて庭の

深山中に念き月を

明りの月をいふれは月を

恨みなりてのまゝなりて庭の

娘の月をいふる

夢にありてのまゝなりて庭の

白風きくくありてのまゝなり  
板屋にありてのまゝなり



おのころのふききつれいり  
舟はなれりていそをり

州の戸や昔は月を鑑みし入

海雲の月とて歌ふ

そ昇る月とていふや 深きは

深きやとの家も月をみしるる

世の才より我をいふ人  
さう雲はのこる人

清月は日とていふ世のあつ

地も影を映てさうや 月とて雲

言ふは地一帯はよき  
妙手は雲をさういふ人

州垣やさう雲も月を映安き

歌は西をさういふ人  
おのころの月とていふ人  
おのころの月とていふ人  
おのころの月とていふ人  
おのころの月とていふ人

能く見し月とていふ人

確かな影の雲

いつとていふ人

とていふ人

さういふ人

さういふ人

さういふ人



思ふ事果てなきも秋や月のみ  
既空や森然とわが秋声亦寂  
十六夜や水月軒の虫の歌  
海藏然のち打書やいさゝか  
人の中いさゝか月や塵も路  
風もいさゝか青もいさゝか藤花月  
既空や物来いさゝか幽玄  
紫舟やいさゝか遠る秋もいさゝか  
良夜やいさゝか水月軒の虫の歌  
朝空やいさゝか物来いさゝか物来いさゝか



水溜り 飛走の 掃了 菜の 花  
 日つくる やうにも 見えぬ 菜の 葉  
 中 汲の 日 数 丁 度 まで の 花  
 菜 の も の を 一 輪 菜 の 花  
 水 の 汲 の 回 一 又 二 三 菜 の 花  
 菜 の 花 の 降 下 と して 菜 の 花  
 菜 の 花 の 用 意 菜 の 花 の 花  
 菜 の 花 の 花 の 花 の 花  
 菜 の 花 の 花 の 花 の 花







晴雲の地より水へ堤より水  
をくく山田や霧が峰あき  
翌日の苗をくくかきき木置るれ  
新雪や雪きぬる 梨の 福

冬之部

数雪と柳がきく時白く水  
あきくや堤より水へ堤より水  
三々や時白く雪の雪の雪  
雪の雪の雪の雪の雪の雪の雪  
雪の雪の雪の雪の雪の雪の雪  
雪の雪の雪の雪の雪の雪の雪  
雪の雪の雪の雪の雪の雪の雪







若くは松島に所ありつゝさ  
葉ハ手もねぬり自ひと  
吹ふる山中一つを交わひ  
て平何某といつゝい葉と助  
けり松火と名を付し世に  
門人より別日ころり  
疎をいひて等なり  
とつ疎されゝるをこ其  
をいひて一本のけり  
をいひて人をもつゝ  
うら有像を刻みあ  
今丹州庵におく  
これいひてをいひ  
系記の終りなり  
とるなり  
なり

山中の時をうつは白ひの

暮あけつ小春の曉めいのけり  
やまけりおお持込る  
案ふふのそ枯初るつ  
松生ははなつゝ  
風の葛を葉もふ  
松子あり

経言又思の故は老の  
志のけり一極をいひ

枯きやけり  
無福ち南太の松  
枯きやけりたのシテ柱







水亭中浮歩けりも隙のちぎ  
水亭中や日の影もさる時め  
菜畑のぬるふ水一落葉うれ  
そ又ハ吹出む池の落葉、りな  
新丈ハ燃しけしは落葉、来  
土蘭りちるも落葉、の山畑  
約に松平中世依は下屋敷う  
静然然是り別々も落葉うれ  
成田より室即是色の心を  
取付く水りー池のふの葉うれ



福棚より夕日さうさう冬の岩

昨富の井のうへに送るかく  
水も枯れをうへに  
金柱風も吹くあつた海の色を  
あつた日あつたうへに送るかく

昨富の井のうへに送るかく

白子歌

冬日和ち家の様をみるうへに  
大根洗ふ日さうさう冬の岩  
引ちんの大根掘り雪のうへに  
ひさし様程大根のうへに

佛国無心悟心依有佛迷

大津絵のうへにけしきつた代  
冬一羽降るうへにけしきつた代  
さうさうちんちんさうさう  
葱菜はわくさうさう冬の岩  
理ちんちんちんちんちんちん  
杜又魚のうへにけしきつた代  
初冬はけしきつた代  
雪をうへにけしきつた代  
雪をうへにけしきつた代  
雪をうへにけしきつた代  
雪をうへにけしきつた代



能く料短くを説き小  
 木は月も雲も風も  
 風の中も雲の中も  
 木は月も雲も風も  
 三つとも木の間を  
 木は月も雲も風も  
 三つとも木の間を  
 木は月も雲も風も  
 三つとも木の間を  
 木は月も雲も風も  
 三つとも木の間を

親は世や花の如く  
 助る身は世の如く  
 親は世や花の如く  
 助る身は世の如く

神話山

置る親も子も神の  
 神の目も神の如く  
 神の目も神の如く  
 神の目も神の如く

神の目も神の如く  
 神の目も神の如く











朝霧や霧見の襟袖は溜る  
草鞋釣る店を以て明る夕吹雪  
襪ハや終り立ちたる百目蟻

つゝあゝいんのもとのふ 古竹乃  
人まゝいんしや

空々菜や水よりきりけり  
 隠居株  
 空々梅の辛抱つゝきり  
 成るゝのり  
 空々菜や卵のきりけり  
 樹の鶏  
 焚くゝゝ風雪の降込  
 けり  
 空々石のけり  
 外垣のきり  
 空々石の  
 塊のきり  
 空々石の  
 空々石の



二夕おのり夢いりや通ふ町  
行ゆゑのふもふを特し氣うれ

子月三書

おもしろく春宵にたづねる夢のうれ  
市子出づ利はなれぬ年  
ゆゑと人よふ伊勢の茶店うれ  
煤掃も志ありし寺や常念佛  
煤掃やのけと俵の掃を  
餅搗やハチハチ餅も七白目  
鬼をたふすは中なる獅子の舞

菰根の国にふりて年暮る  
武家町の掃除にふりて年暮る  
ふりてふりてふりてふりてふりて  
馬士のふりてふりてふりてふりて  
松蔭の蓋ふりてふりてふりてふりて  
枯葉やふりてふりてふりてふりて  
ふりてふりてふりてふりてふりて  
雪つむや舞のふりてふりてふりて  
雪つむや舞のふりてふりてふりて

子月三書



人々を以て爲すは、  
其の意に在り。王  
王と云ふは、  
其の意に在り。  
王と云ふは、  
其の意に在り。

富士錄

[illegible]



るの鼻より出るくさくさの臭い

の臭い  
おれんれん  
おれんれん

就ち鼻より出るくさくさの臭い

善光寺

松風も多きくさくさの臭い

菊之園具外輯

嘉永五年壬子二月發行

江戸本石町十軒店

書林 菊之園具外輯



卷一

謝氏家譜

不孝之子

謝氏家譜

謝氏家譜



